

『武家の古都・鎌倉』の世界遺産登録をめざす

神奈川県・横浜市・逗子市の取り組み **横浜市・朝夷奈切通と称名寺**

横浜市教育委員会生涯学習文化財課文化財係 佐藤 孝さん

鎌倉市とともに『武家の古都・鎌倉』の世界遺産登録を推進している神奈川県・横浜市・逗子市の行政と市民活動の取り組みについてお伝えするコーナーです。

第2回目は横浜市の行政の取り組みについて、横浜市教育委員会の佐藤孝さんに伺いました。

「武家の古都・鎌倉」の鎌倉エリアから一つだけ離れたところに「称名寺」があります。

この称名寺が所在する横浜市金沢区は、かつて鎌倉の東の境界に位置し、鎌倉の経済や防衛を支える要衝の地でした。当時、六浦津と呼ばれた天然の良港があり、房総や東国との窓口となり、後には中国大陸との貿易港として賑わいました。朝夷奈切通は、鎌倉と六浦津を結ぶ幹線道路として鎌倉幕府が開削しました。この道路（六浦大道）の大部分は環状4号線に変貌してしまいましたが、沿道の町名や小中学校、バス停などに「大道」の名称を残しています。鎌倉から東に向かい、朝夷奈切通を越えて六浦大道を進むと、南側には岬に囲まれた六浦津が広がり、瀬戸神社から瀬戸橋を渡って北上すれば、入江を臨む台地の中腹に金沢北条氏の居館と称名寺が構えられていました。

朝夷奈切通は、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』の仁治元年（1240）11月30日に鎌倉と六浦津の間に初めて道路を作ることが決定され、時の執権北条泰時がみずから現場に赴いたと記録されています。工事は翌年4月に着手されましたが、土石が崩落して道路が埋まるたび修復が行われたようです。その後も、江戸時代を通じて麓の住民の手で道路改修が続けられ、切通沿いに道（坂）普請の供養塔が残っています。大切通から少し下って三叉路を右に進むと、鎌倉鎮護のため勧請されたと伝えられる熊野神社があります。神社は江戸時代に再建され、峠村（現、朝比奈町）の村民により社殿と祭事が維持され今日に至っています。切通は神社に至る参道の一部でもあり、江戸時代から続氏子18戸により、切通路や境内の除草や清掃などが現在まで定期的に続けられています。

文化財（史跡）は、貴重な国民的財産として保存管理し、また安全に公開することが必要です。朝夷奈切通は山腹を貫く山道で、落石や倒木が生ずるたびに、地権者等にお願いしながら処理してきましたが、教育委員

『武家の古都・鎌倉』の範囲は、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に、北は山内（北鎌倉）、東は六浦（横浜市）、西は片瀬川（藤沢市）、南は小坪（逗子市）と書かれています。

世界遺産登録では、そのうち横浜市金沢区の称名寺と鎌倉市との境にある朝夷奈切通、鎌倉市と逗子市の境にある名越切通や和賀江嶋が含まれる区域を構成資産としています。このため、神奈川県と横浜市・逗子市も早くから、鎌倉市と同様に遺産の研究・保存管理の努力を続け、大きな成果を挙げています。

会では昨年度から史跡整備検討会を組織して崖面の崩落防止に係る調査を行い、今後対策工事の実施や樹木管理、路面整備などを図っていくことにしています。

一方、称名寺は、大正11年（1922）に「称名寺内界」が史跡に指定され、翌年に神奈川県久良岐郡金沢村が管理団体に指定されました。江戸時代に金堂や仁王門、釈迦堂などが再建されたものの、寺勢は衰退し、大正初期の写真には裏山は茅場、境内は一面水田となっており、史跡としての維持管理には自治体の指定が必要であったと思われます。昭和53年から62年にかけて本格的な発掘整備事業が実施され、苑池と平橋・反橋の復元整備が行われました。その後、橋の腐朽が進んだため、世界遺産登録準備事業のなかで両橋が架け替えられました。現在は境内の日常的管理を称名寺愛護会に委託し、また NPO 法人横濱金澤シティガイド協会は土・日曜日に境内の案内を行っています。教育委員会では、地元住民や団体と連携し、山稜に抱かれ閑静な住宅地の中の寺院環境を守りながら称名寺の保存管理を図り、案内・説明板の設置やパンフレットの発行などにより一層の公開活用を努めています。



横浜市教育委員会作成のリーフレット（表）